

4. 平成17年度婦人防火クラブ連絡協議会幹部地域研修会（九州・沖縄ブロック）

平成17年度九州・沖縄ブロック婦人防火クラブ幹部研修会

平成17年度九州・沖縄ブロック婦人防火クラブ幹部研修会が、去る11月24日（木）に熊本県山鹿市の国指定重要文化財「八千代座」において開催されました。

この研修会は熊本県婦人防火クラブ連合会（会長 三浦貴子氏）と財団法人日本防火協会の共催で開催され、九州・沖縄ブロック各県の婦人防火クラブ代表者や熊本県内各地の婦人防火クラブ員等約160名が参加しました。

主催者等のあいさつのあと、消防庁国民保護・防災部防災課の所健一郎地域防災係長から「地域防災と婦人防火クラブ」と題しての基調講演が行われ、住宅用火災警報器の設置義務や昨年発生した様々な災害における消防や自主防災組織・婦人防火クラブ等の活動状況を写真も交えてのスライドで紹介していただきました。

併せて今後婦人防火クラブに期待される活動等についてのお話をいただき、新潟中越地震・水害などの大規模災害での活動状況などの内容に参加者達は大変興味深く、講演に聞きいっていました。

その後、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特認助手（当協会刊「婦人防火クラブリーダーマニュアル（I）作成委員）菅磨志保氏により「災害が来たら、災害が来る前に～地域防災力の向上をめざして～」の講演が行われました。

阪神・淡路大震災の経験と教訓からの地域防災の推進や新しい仕組み、地域防災力の向上に向けて、災害・防災をトータルに捉える「減災サイクル」について、これからの地域防災活動に向けて、「非日常」と「日常」をつなぐ地域防災活動の視点と手法についてなど、実際の活動や具体例などを、スライドや映像を使つての講演に、参加者達は自分達の地域で災害が起こった際の活動指針となったことと思われまふ。そして、人と未来防災センター監修による震災発生により都市基盤が崩壊していく阪神・淡路各地域の様子再現CG映像では、その被害の大きさに、改めて災害被害の恐ろしさを学んでおりました。

また、今回の会場である八千代座の舞台を使い、山鹿灯籠踊りが披露され、伝統の踊りの素晴らしさに会場からは大きな拍手がおこりました。

休憩後、「地域に暮らす障害者（災害弱者）の立場から望むこと」として、熊本県点字図書館館長西田洋一氏、NPO法人ヒューマンネットワーク熊本事務局長 友村年孝氏から講演をいただきました。障害者の現状や、行政や周囲の方々に対する要望などが当事者の視点から語られることにより、災害弱者に対する防災体制の確立の重要性を実感しました。

研修会1日目最後に、玄海島婦人自衛消防隊防火クラブ隊長 松田咲子氏、副隊長 林珠理氏のお二人により「福岡県西方沖地震について」と、山鹿植木広域行政事務組合消防本部 朝倉宏昭氏により「防災コミュニティー」と題しての事例発表が行われました。そのうち、玄海島婦人自衛消防隊防火クラブのお二人から当日発表された体験談のご提供を頂きましたので下記にて掲載いたします。

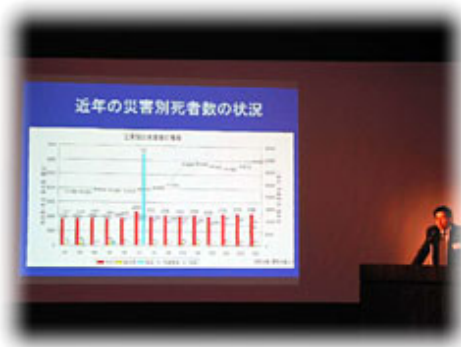
夕方からは交流会を開催し、各県・各地域間で情報交換を行い、交流を深めました。

なお、当ブロックの次年度の開催県は佐賀県と決定しており、同県の女性防火クラブ連絡協議会時津涼歌会長より、交流会において「佐賀県でお会いしましょう。」との挨拶が行われております。



翌日25日（金）には、熊本県立装飾古墳館へ施設見学に向かい、公共施設の防火対策、火災時の避難誘導についてなどを見学されました。

2日間の短い日程でしたが、講演・施設見学等を通じて防火防災知識の向上及び各県・各地域間の連携の強化が図られ、今後の活動や取り組みの上でも大変有意義な研修会となりました。



[このページの上に戻る](#)

事例発表「福岡県西方沖地震について」より 「地震を体験して思ったこと（1）」

玄界島婦人防火クラブ 隊長 松田 咲子

去年の3月20日日曜日午前10時53分、福岡県の西方沖で震度6弱、マグニチュード7の地震がありました。地震について詳しい専門家の方の話によると、実際には震度7相当だったそうです。私達が住んでいる玄界島は、その中でも特に被害が大きく、家の全壊、半壊また、道路の陥没、損傷など見るも無惨なものでした。まさか自分達の身に、このような地震が起きようとは思っていませんでした。

その日私は義理の姉の家にお彼岸の中日ということもあり、親戚の人達と一緒に茶の用意を手伝っている最中でした。そろそろ、お昼の支度を始めようとするその時でした。いきなり、「ゴオー」という地面から突き上げてくるようなものすごい音がして、小さな揺れを感じ、「地震」と声を上げた瞬間、激しい揺れに変わってしまいました。立っていることさえも出来ず、床に這いつくばっていました。しばらく経って、顔を上げて周りを見渡してみると、家財道具、食器棚ありとあらゆるものが倒れ、食器類などが、あたり一面に散乱していました。このまま家の中に居ては危ないと思い、とにかく外に出ることにしました。自宅はどうなっているのか、母、兄弟、親戚、他の人達は大丈夫なのか心配で、自宅に向かって走っている時でした。その日漁に出ていなかった男性の消防団の幹部の人達が、津波が来るかもしれないので、上の方に避難するよう必死に呼びかけていました。その指示で、住民全員一旦、小中学校などに避難することになりました。漁に出ていた人達も玄界島の状況を無線やラジオで知り、漁を中断して帰ってきました。玄界島に残っていた男の人達と漁から帰ってきた男の人達、レスキュー隊



の方達が主に、お年寄りや子供達が下敷きになっていないか、ちゃんと無事であるかどうか救助にあたっていました。

玄界島は人口が約800人余りという小さな島ですので、島の住民のほとんどが顔見知りということもあり、近所に誰が住んでいるのか、住民全員が把握しているので、どこどこのおじちゃん、おばあちゃんが見当たらないと思ったら、皆が協力し合って、足腰が不自由で歩けない高齢者を担架で運んだり、おんぶしたり、学生の人達も手伝っていました。主人や他の人からの話を聞くと、男性の消防団の方達や漁業組合の従業員の方、役員の方達が、民家を一軒、一軒回って、ガスの元栓を止めたり、電気のブレーカーを下ろしたそうです。このような努力と連携プレーが、二次災害を防ぐことができたのではないかと思います。これがあと、一時間遅くお昼の時間帯だったとしたら、火災が起き、死者やケガ人が続出していたかもしれません。二次災害がなかったのが、何よりの救いだったと思います。

地震直後、小中学校に避難してしばらく経ってから、公民館に全員避難することになりました。私達婦人消防ではお昼前ということもありましたので、まず食事をされていない人がほとんどだろうということで、ごはんを炊いてあるお宅はないか訪ねて、持って来れる人は炊飯器のまま持ってきてもらいました。それをおにぎりにしてお年寄りや子供達を優先に配ったり、水分を補給しなければいけないので、お店の店長さんに頼んで、ミネラルウォーターやお茶類などを、あるだけ全部出してもらいました。自衛隊の方達も次々と到着され、市の方から、九電記念体育館（博多）の方へ避難するよう要請があり、午後5時には玄界島から住民全員、着の身着のままの姿で市営渡船に乗り込み、九電記念体育館へと向かいました。その日の夜から九電体育館での避難所生活が始まり、4月26日までの約1ヶ月ちょっとを過ごしました。

この避難所の生活の中で、私を感じた事は、県や市の災害に対する対応がものすごく早かったことや、自衛隊の方達による手作りのお風呂を作って頂いたこと、また色んな方達による演奏と歌、踊りは精神的につらく落ち込んでいる私達の心が癒され、どんなにか励まされたことでしょう。ボランティアの方達による炊き出し、マッサージ、県内県外からの物資等や義援金など、一つ一つ上げるときりが無いほどです。私達の為に、こんなに多くの方々が取り組んでくださっている姿を見て、感謝の気持ちで胸がいっぱいになり、自然と涙が溢れて止まりませんでした。

私はこの地震を通して、失うものの大きかった分、人というもののありがたさや、相手を思いやる心、助け合いの精神は今まで以上に強まったと思います。人は周りの方達に支えられて生かされているのだと身にしみて考えさせられました。これから、復興に向けて、婦人消防でも火災などの消火訓練だけでなく、地震が起きた時の対処の仕方なども同時に考えていかなければいけないと思いました。常に感謝の気持ちを?鎖¥?!?忘れずに取り組んでいきたいと思っています。

[▲このページの上に戻る](#)

事例発表「福岡県西方沖地震について」より 「地震を体験して思ったこと (2)」

玄界島婦人防火クラブ 副隊長 林 珠理

3月20日地震当日私は公民館の当番で事務所のソファーに座っておりました。そしてあのゴオ～というものすごい音がなり、揺れが始まりました。

最初何が何だかわからずただぼう然となり、ソファーにしがみついていた。そのうち、そこにおいてあるロッカーが次々と倒れガラスは飛び散り、それで我にかえり「地震?まさか! こういう時、どうすればよかった?」と自問自答し這うように机の下に身を小さくしてかくれました。

その間「あっ、もうだめだ、建物の下敷きになって死ぬ。家族もみんなもだめだろうなあ」と何度も何度も思いました。激しい大きな揺れがおさまると同時に家



族の安否が気になり自宅へと向かいました。しかし、毎日通っていた道路は石垣がくずれふさがり悲惨なものでした。息を切らし自宅玄関を開けると同時に上の娘の名前を大声で叫びました。

「はいっ」という娘の声が返ってきたとたん、安心と同時に93歳のばあちゃんのことを頭によぎりすぐに部屋へと急ぎました。娘はタンスの下敷きになっているばあちゃんを母と2人で一生懸命助け出そうとしていました。その時やはり高齢者が犠牲になるのは、身にしみて実感致しました。

ばあちゃんをタンスの下から助け出し、おんぶしたものの急いで長い階段を上り自宅へ向かった為、息は途切れ余震もあり足元はガタガタでとても恐ろしかったです。まずは、近くの神社へ避難しました。その間も何度も余震がある中、近所の人達の声かけ安否確認等、みんなが思いやり、一生懸命でした。それから公民館へと避難場所を移動しました。公民館では、防火クラブとして何か出来ることはないかと自ら集まりました。食料や水等の飲料水の呼びかけ、子供と老人に食事を配ったり人数確認にあたり、水洗トイレへの井戸水の運搬等に動きました。

もし、私が防火クラブに所属せず一般住民であったなら、ただ家族のことばかりを気づかい周りの手助けが出来ていたかどうかはわかりません。防火クラブに所属していたからこそその責任感という気持ち、こういう行動として表れたのだと思います。

島民全員が生存できたのも地震の時間が午前中であったこと、周りとのコミュニケーションがとれていて島民全員が一致団結していること、そして日頃から「自分の家から絶対火を出さない」という強い意識を常に持っていることだと思っております。これから地震はどこでおきてもおかしくないという意識と日頃の防災避難訓練、周りとのコミュニケーション、言葉かけ、情報伝達は重要なことだとあらためて思います。

今、家族はかもめ広場と玄界島の2つに分かれて暮らしておりますが、沢山の人間からの激励、色々な物資が寄せられております。この世の中物騒で怖い事件が多い中、こういう人の優しさ、思いやり、ありがたく感謝しております。私達は地震でなくしたものは、とても大きいですが得たものも大きいものがあります。それは、人の思いやりの心です。この全国からの沢山の励ましの心に感謝しながら、島の復興にむけて島民の安全の為防火活動に頑張っていきたいと思っております。

[▲ このページの上に戻る](#)

目次

- [1. 新春のご挨拶 \(消防庁国民保護・防災部長 小林恭一氏\)](#)
- [2. \(財\)日本防火協会常務理事新春ご挨拶](#)
- [3. 新潟県集中豪雨・中越地震その後 第2回 \(婦防リーダーマニュアル作成委員 全国地婦連浅野幸子\)](#)
- [4. 平成17年度婦人防火クラブ連絡協議会幹部地域研修会 \(九州・沖縄ブロック\)](#)
- [5. 平成17年度自主防災組織リーダー研修会 \(広島県・富山県\)](#)
- [6. 住宅用火災警報器の普及啓発に向けて、各地で婦人防火クラブ員研修会を開催](#)
- [7. 平成17年度婦人防火クラブ員救急講習会](#)
- [8. 旭日双光章を受賞して \(元静岡県女性防火クラブ連絡協議会会長 現相談役 橋本静子\)](#)
- [9. 幼年消防用活動資器材の活用について](#)
- [10. 地方からの便り](#)
- [11. 新年挨拶 ガス警報器工業会会長 重盛 徹志氏](#)
- [12. あなたも危険物取扱者・消防設備士](#)
- [13. 日本防火協会からのお知らせ](#)
- [14. 稲むらの火の紙芝居、DVDを作成](#)